

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可
昭和五十二年十月十五日 發行(毎月一回・十五日發行)

(通第三四〇号)

次

ただ念仏して

池山栄吉……………①

たのもしさ

池山先生聞信記……………聚墨生……………⑱

念仏詩抄……………木村無相……………⑲

目

① 698.26

法信抄「念仏のつげ」

親鸞もこの不審ありつるに……………花田正夫……………⑳

慈光

第二十九卷

第十号

ただ念仏して——たのもしさ。

(一)

池 山 栄 吉

(註) カッコ内の文章は「ただ念仏して」の題で先生が親鸞聖人讃仰文を書かれたもので、それに併せてのお講話です。

「ただ念仏して」という言葉は、聖人の、よき人の仰せに聞いたきわみであり、信の告白としてのかなめであり、また人に信をすすめるおくのてでもある」

親鸞聖人が、よき人、法然上人から、直々うけたまわられた極致、聖人御自身の信仰の告白の肝要、また御自身の信仰を、人に説き聞かせようとするときの最後の切札。いずれもその現われる方面こそ違つていますが、ものは一つなんです。ただ念仏して」という、それだけなんです。

「ただ念仏して」の出処はよく御存じでしょう。私のいつもよく引合に出すあの歎異鈔第二章「親鸞におきてはただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せをこうむりて、信するほかに別の子細なきなり」あれ

この言葉に引込まれて、じゃ私もと、急にまねる気になつて、断然声に出したのが、あこがれの信界への踏切りであつた」

これは、私をはじめ「ただ念仏」する気になつた刹那の経過です。この「ただ念仏して」という言葉を手引にするのです。めくらがめあきに手を引かれて歩くように。

この言葉を手引きに、念仏を、信仰を、受入れた人は、親鸞聖人を先達として、今日までにどの位の数にのぼるか、とても想像も及ばないほどであろうし、また将来どこまで行くことや、ただ無数無限というほかはあるまい。

私なんども矢張りその一人なんです。或る時、信仰というものが欲しくて、欲しくてたまらなかつた時です。ただ念仏してという言葉が、フト胸に浮かんだのです。ああ聖人はそうされたのか。「じゃ私も」これが私の入信の合言葉です。親鸞聖人もそうなんだ、じゃ私も、南無……。

私は本来念仏が出にくかつた性(たち)、なかなか念仏が出なかつたので、ひそかに弱つていたのです。信仰はあると思つているが、念仏がともなわなないのは変だな、と思つていたので。それが、あのお言葉が胸にうかんだとき、じゃ私もと、思い切つて断然声に出した。断然、南無とい

ですな。あのお言葉は、師の仰せの骨子ですな、同時にまた思い切りきりつめた信仰の告白ですね。じゃその信仰を人に伝えるにはどうしたらいいか、という矢張りそのま、その通り言うのに越したことはない。

それはまっさきに店頭に飾るべき標本であり、また良買の深く蔵するところでもあるのです。「私はただ念仏して弥陀にたすけられなさいと、先生の仰言つたのを信じているだけなんですよ」こう人にむかつて言う。それがそのまま、わが信仰を人に伝えたいと、満腔の誠意をこめて仰言のお言葉、教人信の最後の通牒(つうちよう)である。そのことは、同章の最後に「詮ずるところ、愚身が信心におきてはかくのごとし。このうえは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからいなり」とあるのに照らしても解りましょう。

「この言葉を、信への手引として受入れたひとは、かざかぎりもないことであろう、私などもその一人である。

いかかつた途端です。まだ阿弥陀仏といいきらないうちに腹のどん底から盛りあがってくる衝動、破壊と建設と一緒くたに、ごつたがえす混沌の中から、朗々と声に出る念仏、高らかに、とめどなく。やがてふと気がついて、我と我が心を見つめて、あ！これが信仰かと、うなづいたことをおぼえている。

つまり咽喉もとにとどこおる念仏を、思い切つて声に出したのが、あこがれの信界、信仰の世界への踏切りとなつたので、これも私のよく云うことですが、信界への転向には、踏切りとか、飛び込みとかいうべき、思い切りが肝要だと思ひます。

「ただ念仏して」ということにしても、解つてから念仏しようという態度では、いくら考えて見たつて、なかなか夜が明けなれないと思ひます。どうせ信仰の世界は、普通の感覚、感情、論理等の世界とは違つて、合理一方の標準で割り切れるものではないのですから、まあいい加減なところで、というのが余り無造作に聞こえるなら、おおよそ見当のついたところで、一躍、飛び込みを断行するより仕方がありません。どんな風にして？「じゃ私も」の掛声で！親鸞聖人が「ただ念仏して」と言つていられるのだから、よし、じゃ私も真似しよう、南無……。これも——無論これば

かりではない、他にもだんだんあろうが―飛び込みの骨の一つだと思えます。

「今日わが国では、津々浦々にいたるまで、念仏の声のひびき渡っていないところはない。日本人にして、この声を或は口にし、或い耳にした覚えのないものは、おさなごを除いては一人もあるまい、さすが大乘相応の日域、こうあるのに不思議はないが、他面、宇宙一切の事物は、そのはてしない流転の相のうちに、鐘の音をさえ諸行無常とひびかせて、遠く近く、裏に表に、人生の最大緊急の問題、ただまことなる念仏への関心をそそらないものはない」

念仏のひびきが、普く海内に行きわたっていることは、まことに驚くべきものがある。山間僻地にいたるまでと言つてもよし、或はまた逆に、大都市の繁華の中樞に至るまでと云つてもよい、いたりいたらぬ限はないのである。もし或る人間が、日本人であるか否かを知る必要があるとしたら、まず第一に、念仏を知っているか、どうかをためしてみるがよい。知らなかったら疑いもなく、それは日本人ではない。

幼児にだつて念仏というものの存在を知らせる機会は多

う、或は遠大に、或は卑近に、いろいろな方法手段の講じられるのも怪しむに足らないが、宇宙全体の現象も、自然のそれにもせよ、人事のそれにもせよ、或る意味において、皆ことごとく念仏への示唆（しさ）を含んでいる、と見られるから妙である。万物は流転する。一切はよどみに浮ぶうたかた、かつ消えかつ結んでしばらくもやまない。四六時中地震と津浪に見舞われているような人生。そこには必然的に不安と焦燥が巣くう。だからその対照の安心と落着、無常輪廻の支配する現実に対して、その反対の常住にして変易なきものへの要望がおこるのは自然である。そしてその要望を充たすべく、自ら進んで約束するものが念仏である。聖人の言葉をかりて云えば

「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもてそらごと、たわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします。」

で、ひとり念仏のみこそ、主観的にも客観的にも、罪悪業報の重圧にめげぬ、末通りたる無碍の一道、金輪際ゆるぎなき、唯一恒常の立脚点であるのである。

考えて見れば、人生これほど緊急な問題はない。だから、と私は性急に、手取り早く結論する、凡そ世間一切の事物は、それ自ら知ろうが知るまいが、流転の姿そのまま

い。まだろくに舌もまわらない子供にさえ、お月さんに向つては、ののさんなんまんだぶと、お辞儀させるなどは、浄土教系の家庭には珍らしくもないことであり、そのほかこれに似たような偶発的（ぐうはつてき）、もしくは計画的機縁が随処におこなわれる。現に私なども、たぶん四つか五つ位の頃でもあったろう。近所のあちこちに、百万遍という催しがあつて、よく友達と一緒にかけたものである。其処には仏壇の飾つてある部屋に、十人二十人の子供をぐるりと丸く坐らせて、その内側に畳六帖ほどもあるかと思われ、大きな珠数が展げてある。子供は両手にその珠数を握つて、膝のあたりまで持つてきて、誰だか一人大人の人が、ナムアマミダブツと称える音頭につれて、異口同音にナムアマミダブツと叫んで、順繰りに珠数をくる。それを何遍となく繰返して、やや厭き気味になつた時分にひと休みする。すると御褒美としてお茶が出る、お菓子が出る、それで元気が出ると、またはじめる、といった調子。西も東もわからない頭はない子供を、こうして念仏になじませようとする仕組、私のでくわしたのは東京だったが、外の土地にもまあることらしい。おかげで私もまだ幼年時代の昔、力一杯声はりあげて、無我無中で念仏する経験を、早くも済ましていたのであつた。

日域大乘相応地とあるからは、普く念仏が行き渡るよ

をしるべとして、来世のさとり前の縁を、結ぼうとする傾向にあると。

こうした見方の一例として、近頃の流行歌を一つ紹介して見よう。それは青い芒と題する歌謡曲で、作者はもとより私のいうような宗教的意味を含めて詠んだのではないが、私が勝手に、それを一つの譬喩と見て、宗教的色彩を加味して見ると、また一種別様の感興が湧いてくる。その歌の初の一節はこうである。

青い芒の野にくれば

風に吹かれて立つ波の

波のゆくえの遠いこと

私はこの歌を聞くとたんびに、まだ生れて来ないさきから今日のいままで、綿々として絶えない業、必然の因縁が、さらに未来永劫に向つて、展開してゆく光景に思いがある。つづいて二節三節にこうある。

遠い思いの野をゆけば

宵をほのかに出る月の

月のすがたの細いこと

細い出月の芒野に

まちもまたれもせぬ身ゆえ

素足しるじろ一人泣く

思いを遠く来し方、行末に走せながら、素足しろじろ歩みを運んで行くと、心にさまざまな空想がうかんでくる。が、その淡さ、はかなさを象徴してか、今出る月の姿の細さ。孤影悄然、せきあえぬ涙、といったおもむき。

全体からうける印象として、吹きすさぶ業の嵐に、はてしない波とさわだつ芒野を、とほとほとたどる一人法師の淋しさが目に見えるではないか。ここもまた二河白道の一地点、語るに友なき、無人空曠の沢である。

こうした場合は、人生いたるところ、なぎさの貝殻のように散らばっていて、手当り次第、採るにまかせてある。

「そもそも念仏は、救いのためにあらわれた力の、その目指すものへの呼掛けである。それをそれとも知らないで、うっかり聞きながす人の、あまりにも多すぎるのは、まことになげかわしいかぎりであるが、考えてみれば、億劫にもまうあいがたい弘誓の強縁とあるからは、また怪しむべきではなく、むしろただ聞いたというだけでも、その人と、かの力とをつなぐえにしの絲は、はやく用意されたものとみなされる。とすればもって多とすべきではなかるうか。進んで念仏の意義を聞いたり、考へたり、とにかく口にしたたりする段になつては、もう絲

たというガラスさえ、それが我国に伝来して、広く建築界に乗り出して紙障子と入れ代りになりつつあるのは、よう現代のことであると思えば、念仏が意味のない声としてなりと、津々浦々まで行きわたっているという事実は、むしろ驚歎に値いすることも知れない。

目指すものへの呼びかけということについて、私自身の経験したカナリヤの話をさしはさんで見よう。

甲南の御影から、京都の紫野に居を移してから間もないことであつた。庭に面した座敷の縁側の片隅に、鳥籠が一つ置いてあつて、それに一羽のカナリヤがいた。それは甲南から運んで来たもので、飼つてからもう二三年になる。或る日、私は座敷から縁側に出て、庭を見ながらあつち、こつちあるいていた。その時フト気がついてみると、私が籠の方に向つてあるきだすと、カナリヤは急に動き出してとまり木の上で、或は前後、或は左右に身をゆるがしたり、時には羽ばたきして前の金網につかまったりして、威勢のいい声で、チューツチューツと鳴く。ハア今日はよく鳴くわいと思ひながら、籠の前で廻れ右をして、引返して籠から遠ざかつて行くと、間もなく鳴きやむ。壁に突きあつたて、また転じて籠の方へ近寄つて来ると、まゑと同じように鳴き出す。離れると止め、近づくと鳴く。何辺繰返しても同じことだ。ハテ妙だなと思つて、今度は途中でさ

のはしとはしとが、ある交叉状態に向つて動きつつあるのである。が、それがしつかりと結びあげられるまでには遅かれ速やかれ、若干の時を要とするのが常で、その間には、深淺、強弱、方向の正否等の視点から、いろいろの段階がみとめられ、さまざまの転化が行われる。」

一体、念仏というのは何か、それはよびかけである。救いのために現われた力が、目指すものへの呼びかけである。と私はいう。ここで救いというのは徹底的の救い、末通りたる大慈悲の発動による人格の無上完成という意味である。その救いを目的として、これを實現せんがために現われた力が、目指すもの、即ち、私達へ呼びかける声が念仏である。

念仏を耳にしながら、そうとも知らずに、うっかりぼんやり暮している人が、多いというよりは、むしろほとんど皆然りといった方が、事実に近いかと思われるくらいなのは、まことに長太息に値いすることであり、齒がゆさに堪えない次第であるが、考えて見れば、多生にもまうあいがたい弘誓の強縁、億劫にも獲がたい眞実の淨信とあるのに徴すれば、そうあるのは自然の數だともいえよう。三千年の昔、フエニキヤ人の手許でほとんど完成の域に達してい

つと座敷へはいつてしまふ。そのすると鳴き声はたと止む。一寸間をおいて座敷から縁側へ出ると、忽ちチューツチューツと鳴き続ける、これまた、しずのおだまきくりかえしても際限がない。そこで私は家人を呼んで、おいおいみんな来てごらん、このカナリヤは妙だぜ、人が見ると鳴き出して、見えなくなるとだまってしまふ。やつてごらんと代る代る私のしたようにやらしてみると、可笑しなことには、すこしも鳴こうとしない。じや今度は私がと、やつてみると、啼くのも止めるのも前とすこしも変らない。みんながくやしがつて、今度こそはとやつてみるが、どうも仕方がない。カナリヤが人を見かけて鳴くのは私だけなのだ。

それ以来、時々ためしてみたが、結果はいつもおなじことであつた。そこで私は思った。この鳥籠は、甲南時代からずつと私の居間近くに置いてあつたのだが、鳥はいつのまにか私を見覚え、私になじんで、私の姿の見えるたびに私に声をかけるのであつた。私の方では、そうとはさつぱり気がつかなかつたのだ。このカナリヤは、私一人を呼んでいたのであつた。曠劫多生のあいだにも、出離の業縁しらざりき。念仏を私への呼びかけと、つゆ気がつかずにいたと同じように。

念仏の声を、ただ耳にとめたというだけでも、その人と

救いの力とを、結びつけるえにしの絲が、早くも用意されたというのは、芝居に譬えて云ってみようなら、一とまず道具立が済んだというくらいのもので、その糸が或る程度の交叉状態に向って動き出すのは、いよいよ所作がはじまってから、云い換えれば、念仏についての考察なり、実践なりに、取りかかってからのことで、それからその人、その場合に相応する内外の機縁次第、或は単刀直入、或は紆余曲折、それぞれ固有の段階を経て、結び仕舞いの大団円へと運んで行く。

「が、その中で、念仏のいわれを聞くことはきいても、それについて多少の考慮を払っているというだけで、まだ實際念仏する、というほどにたचितたっていない一類と念仏に或る価値を認めて、とにかく念仏しつつある一類とでは、最後の目標へのへだたりから見ると、亀と兎のかけくらべ、必ずしもどちらが先に行きつくとも限らないが、前者の前途なお遠遠なのにくらべると、後者の地点からは、もう山が見えている、念仏の出る出ないを界として、前者は単に素見（ひやかし）の客であるのに反して後者はすでにいわば力との直接交渉の圏内に立ち入ったものと見られる。

ここはもう道具建がすんで、いよいよ役者が登場した段

たいと思うが、私はまずここにその前提として、念仏の一大特質、反復性をあげておこうと思う。念仏には繰り返される性向がある。どうしてそうなのか、その理由はしばらくおいて、とにかくそうあるのは事実である。だから念仏の道具立、すなわち、えにしを結ぶ糸として、力と人との間に、念仏が置かれたということが、ただそれだけで、すでにゆゆしき一大事なのである。それだけの事実をいとくちとして、結び仕舞の大団円に運ぶ可能性が、多分に与えられているからである。

念仏は反復する。凡そ念仏を称えるほどの人が、後にも先にも一辺だけで、びったり止めてしまうということは殆どあるまい。念仏は一旦称えられたが最後、連続的に、或は間歇的（かんけつてき）に、多かれ少かれ続けられるが常で、多い人になると、一日何万遍というのさえある。

念仏には初一声を音頭として、あとはひとりて繰出される衝動がある。それが一つの原因でもあろう。念仏は口癖になり易い。口癖の念仏、一寸聞くとたよりないようだが、実はまことによく出来たもの、これも一つの善巧方便とさえ受けとれる。

口癖になった念仏者でも、無論、称えようと思つて称える場合もあるが、そんなつもりもなく、フト口に出してし

である。或者は思案投げ首、しきりに念仏について工夫をこらしている。或者は殊勝氣に、珠数つまぐつて称名に余念がない。いずれも銘々の持役に応じた仕打をしている。

全体を通じて念仏の一大道場とみなせば、画き出す廻灯籠（まわりどうろ）のシルエット。真剣なもの、不直面目なもの、熱烈なもの、微温的なもの、陽気なもの、陰気なもの、頭燃をはらうようにあせり狂うもの、焼いた鳩の飛んでくるのを、空頼みするように呑気にかまえるもの、煩悶懊惱して身をうねらすもの、感悦隨にとおり落涙千行なるもの、至心信樂己を忘れるもの等々、枚挙にいとまがない。念仏に対する敬虔さの濃度を實際にあらわす映像が、次から次へと現前する。

相手かわれど主かわらず、同じ一つ念仏が、相手次第でそれぞれ異なる取りあつかいを受けるといふのも異なることだが、その取扱いが必ずしも一定不変のものでなく、時のたつにつれて、それからそれと転化し、推移して行く結果、今甲の立場は、自分のかつて通ってきた跡、今乙のたどる地点は、自分のやがて行きつくべき先、といった具合に、自他互に後になり先になり、時を異にし、もしくは同じうして、いつか一所に落ち合ふべき傾向をもっているのは、さらに不思議といわなくてはならない。

こうしたいきさつについては、これからすこし述べて見

まうこともある。途中でハット気がついて、それなり止めることもあるうし、そのまま続ける折もあるう。その結果時には現に自分の考えたり、為っていることを、肯定し確認することもあろうし、否認したり是正したりすることもあろう。或はまた新しい思いつきを、早速実行に移そうと決心することもあろう。要するにこうした場合、称える人の対念仏の思想や態度に相応して、称えられた念仏は、大なり小なり、幾分の効力を發揮せずには居ないのである。

念仏はその反復性によって、禪宗の公案が与えられたようなもので、すくなくとも念仏を耳にし、もしくは口にする人は、その意義について、思案をめぐらすべく、自然にさせられる。

さて人と力との関係、対念仏の態度如何は、これを最終の目標―信樂獲得―への距離を規準として測定すると、まずザツと二つに分類できる。一つは、念仏に就いてまんざら考えていないのではないが、まだどうも念仏が出て来ない一団。もう一つは、念仏についてある価値を認めて―反面から言えば、自己の欠陥の補充を念仏に求めて―ともかくも念仏しつつある一団である。

真実の信心はかならず名号を具す、名号はかならずし

も願力の信心を具せず、念仏が出るからといって、キツト
本當の信仰があると限ったわけでもないが、本當の信仰が
あれば、念仏は出すにはいいない。念仏が出ないというの
は、信仰の真偽、正否を検する上には、甚だ不利な徴候の
一つである。

念仏が出るからこれでよい、とかたずけるのも許されな
いが、丸切り出ないようでは、てんで話にならない。それ
はまだいわば広義の信界の手前の境涯で、そのあたりは一
面に、深い濃い雲霧が立ちこめて、行方も知れない。これ
にひきかえ念仏の出る地点は、もう信界の繩張り内になる
ので、そこからはもう山が見える。或は遠く淡墨色に、或
は近く青々と、呼ぶが如く、招くが如く見えている。

山が見えるというのは、も一つ云いかえて、手ごたえが
あると云ってよい。釣でいうと、鮒だか、鯉だか、何んだ
かわからないが、垂れた糸を通して手首にふれる、あの一
種微妙なふるいを感じるので、そうしたてごたえは、静
かに念仏の糸を垂れたおぼえのある人でなくては、恐らく
想像もつかないものであろう。

「力との直接交渉は、念仏を通じて行われる、その進歩
の程度にも、見方によっては矢張り幾多の段階があり、
転化もあろうが、特に際立ったそれの三つがある。念仏

るので、つまり七つ道具の一つに念仏を加えるのである。

そして例えば、その道具を代るく使ってるうちに、慣れ
てみると、念仏が一番使いいい、一番有効だとわかったと
すると、それはもう第二の段階である。念仏を目的達成へ
の努力の焦点として受入れる、そういう段に進展してくる
ので、ここに至っては、成仏への努力が念仏一点に集中す
る。但し、ここで念仏が一番よいというのは、他のもので
も全然間に合わないのではないが、という思惑（おもわ
く）から抜け切らずにいるとも見えるし、且つ念仏一点に
集中するとはいえ、それは念仏をわが力のうちにとり入れ
ようとするところからそうするのであるから、どうもここ
での念仏には、相対的自力的の臭味が着いて離れない。従
ってかの絶対他力のあらわれとして、唯一無二の価値を認
められる念仏とは、相ざること遠しといわねばならない。

「念仏もすてたものではないとか、念仏も結構役に立つ
とか、念仏は他の何物にも劣らないとか、さては念仏に
かぎるとか、それぞれの思惑に動かされて、各々自分の
力を持ち出して念仏に精進すると、そのききめは争えな
いもので、多かれ少なかれ、ある法悦が感じられる。
が、困ったことには、いつも柳の下に泥鰌がいるとは限
らない。どうかするとさっぱり駄目なことがある。法悦

を目的達成の一助と見るのがその一つで、目当達成への
努力の焦点とするのがその二である。」

売買の取引が、通貨の媒介によって行われると同じよ
うに、救いの力と人との掛け合い、交渉は念仏を通して行
われる。念仏は売買における通貨だ。財布の口をかたく締
めたままのひやかしの態度では、念仏の直取り引きは行わ
れない。力との直接交渉は、唯一の通貨であるところの念
仏をもって支払い方法とする条件のもとにのみ成立する。

直接交渉の成立するところ、そこはもう信界の領域であ
る。が、そこで見られる信的状态は、どうもみな同じであ
る。一つである、同一念仏して別に道なき故に、などとあ
つさり片付けてしまうことを許さない。むしろ信仰の転成
の上から見て、極めて重要なかわりめが、彼と此と照らし
合わせて、くっきりと相（すがた）をあらわすを見逃し
てはならない。

さてそのかわりめというのは、大体三つに約することが
できる。その第一は、念仏を目的達成の一助として受け入
れるので、ここで目的というのは、成仏ということであ
る。一助というのは、成仏の目的を達成するには、外にも
いろいろの手段方法があるが、念仏もその一つであると見

の不連続性が、其の一、其の二に共通の徴候で、こうし
た徴候が存続する間は、また本當に念仏が手に入ったも
のでない。その関を超すには、今一度の転化に待たねば
ならない。日頃念仏を心にかけて扱ってはいらぬもの、
どうもしっくり身につかない。どことなく拍子が抜けて
手持無沙汰の感をまぬがれないのは、つまり念仏を作善
の具に供しようとするからである。わが手でまかなう資
料として扱うからである。」

長者の一人息子が、若くして父に別れ、巨万の富を相続
して、横のものを豎にもしないで、べんべんだらりと暮し
ていた。當時の彼の思っていたところによると、人間は各
自定まった分量の力を天から授かって生れてくるもので、
その力を使い果たした時が、命の終る時となるのだから、力
を使うにはなるだけ細く長く小出しにする心懸けが大切
で、これが長命の秘訣だと考えていたので、日常生活もこ
の法則から、出来る限り閑かに何もしないですます方法を
講じていたが、榮枯はうつる世のならない、思いもかけぬ災
難に出遇って、忽ち一文なしの身となり、あわれな境涯に
落ちぶれ、恥も見得もいっていられず、通りがかりの人の
情にすがって、物乞いの手はじめに貰ったものが、ものも
あろうに金貨一つ、しかもそれは、長者時代に、金貨を支

出すたびに、ヒョッとまた戻ってくるであろうかと、一々自分で十字のしるしを刻んで手離していた、その金貨の一つだったので、わが眼を疑うほどに、且つ驚き、且つ怪しみ、万感交々至る中で、今度手離しては、もう戻っては来まいと、愛着のあまりそれを深く内ふところにしてまいこんで、大決心で、道路工夫の群に入った。そして工夫として働きのながら自問自答した。俺は何も今働かなくてもいいんだ、金貨があるんだから、然し働くのが面白いから働くんだけ、俺はただ道楽で働くんだけ、と自分で慰めていたが、その後も働いているうちに、だんだんと、自分の生を享樂のために働くのは、少しもわが品位を汚すことではなく、世間からうけた恩返しとして、世間のためにも何か働くそこに人生の目的はあるんだ。人がその為すべき仕事に全力を尽すのは、即ちその本分を全うする所以だ、と深く自らさとるところがあったという。

これはドイツでは、大人でも子供でも、皆よく知っている〃十字の印をつけた金貨〃というお話。世間に対する見地に立って、持って生れた自分の力についての誤まった見方から、より正しい考えに移って行く一過程を扱ったものである。

さて、救いの力、所謂他力の見方も、だんだんと展開する、また母からも同じようなことを聞かされたことがあって子供心に成程と思ったのであろう。時々やってみたことがある、いな、やってみようと思ったことがある、という方が正確かもしれない。これこそ丁度〃念仏も結構役に立つ〃という見地に立つものであるが、結果ははたしてどんなものか。あたるも八卦(はっけ)あたらぬも八卦、そんな程度のことであろう。

以上あげたような、いろいろの動機からでも念仏するとその中に幾分の真面目さがこもるかぎり、〃洪鐘ひびくといえども、必ず叩くを待って鳴る〃で、大きく打てば大きくひびき、小さく打てば小さくひびく、それ相應の手ごたえがある。するとそれに励まされて、一段と精進する気になる。しかしそれがいつまでも続くといいのだが、どうかするとさっぱりいけなくなってしまう。神通を失った魔法つかいが、いくら咒文(じゆもん)を誦えようが、怪しげな振りをしようが、靈の方で、横を向いて取合わないといった風に、念仏を称しても一向にしろしが見えないという甚だ間抜けた滑稽に墮することがある。こんな等ではなかったがと、焦ってみても、すぐ元通りにはならない。そこで今まで持っていた念仏への考え方がぐらつき出す。

る有様は、さきに言った通りで、前に述べた三つの際立った信仰の状態も、つまり他力の見方いかん、他力の必要性の感得工合いかんによって定まるのである。

前段で紹介した、その一、その二の念仏者、即ち、目的達成の一方法として、または目的を達成するために集中する努力の焦点として、念仏する人は、念仏をもって自力を強化する道具としていのである。

彼等の考えでは、念仏は彼等のもっている力に加勢するものである。場合によっては、自力でも出来ることを手伝いする、即ち自力に加勢する便りとしているのである。

〃念仏もすてたものでない〃などというのは、まあこんな程度の考えで、仏力の自分に必要なと思う最小限度であろう。進んで〃念仏は他の何物にも劣らない〃とか、〃念仏は他の何物より勝れている〃とか、だんだんその程度が高まって来て、終に、〃念仏にかぎる〃という段になっては、自力を強化する最大のものと思われているのだが、それといって、未だ念仏を相対価値として扱う範囲から脱していない。

私の十二三才の時分だったろうか〃腹が立ったら念仏すると段々おさまってくる〃と或坊さんの言うのを聞いた。このように点滅するのは、その一、その二を通じての弱味である。どうしてかといえは〃信心が淳(あつ)くないからきまらない、きまらないから続かない〃それからまたその逆に〃続かないからきまらない、きまらないから淳くない〃と、これが所謂、三不三信の状態で、この根本の誤りは、彼等は念仏をおのが力のうちに取入れようとするからだと云ってよい。彼等の態度は、どこどこまでも自分の力を主とし、念仏を従としていいる。だから自分のその時その時の身心の状態と、それに影響を与える四囲の状況がすこしでも変化すると、そのために信仰そのものが幾分動揺するのはがれられない所である。

こうした信仰の若存若亡の窮境、法悦の続かない状態から脱するには、今一段の転化、横超的とびこえによねらばならない。(次下略)

「念仏の一行にさえ及び難い身であると知れては、地獄一定は免れない数と、焦燥の五里霧中に彷徨して、空しく指南の法輪を翹望(ぎょうぼう)する折柄、幸に宿善開発の時節到来、今まで覚えなひびきを念仏に聴取って、念仏は、救わんとする力から、力なきものへの呼びかけで、念仏する人からみれば、ただそれに応(う)け

答えをするだけのもの、つまり、力そのものの発動のほ
か何でもない、と心証する、これが転化のその三であ
る。

久しく念仏を称え、しているうちに、念仏の手ごたえ
が身にしみて、なるほど念仏にこすものはない、念仏にか
ぎるとまで思いつめて、専ら念仏に救いの善を行しながら
どうもじっくり落着けない。時には汽車の後押しでもして
いるかのように張合いがない、また空家の戸を叩いている
かのように、たよりなきに居たたまらない。よりによつた、
易行のなかの易行と聞く念仏一つに集中しながら、なお安
定が獲られないとすると、自分は到底駄目なのかしら。

あさなあさなに、定めて悪趣に沈まんことを恐怖し、
ゆうべゆうべに、出離の縁の欠けたることを悲歎す、い
ずれの行も及びがたき身なれば、とても地獄は一定すみか
ぞかし、とおおけなくも入信則の法然上人、親鸞聖人の
歎きを、徒らに追体験するのやむなきにいたつたのである
が、どうも仕方がない。この上はただ、あてにならないと
知りながら、一縷の望みを善因たちまち熟し、宿縁とみ
に顕わる、という時節の到来にかけるの外はない。

（一）
歐洲大戦の初期、ドイツ軍が破竹の勢でベルギー領へな

ような非痛な叫びは、去り行く人と犬の影が見えなくなる
まで、空中を満たすのである。見えなくなるとみんなだま
って、身じろぎもしなくなる。相も変らず、もといたとこ
ろへ坐って、そして待っている。

私はこの記事を読んで深い深い感動に打たれた。一日中
頭を一方に向けて主人の掃りを待っている犬の心持を推し
はかると、いじらしくて、たまらなかつた。そのうちア
ト思ひ出したのが、信仰を求める人に、この犬のような一
途の期待があるうなら、という考えであつた。彼岸への憧
懐の矢、こうした心がまえは、獲信、時節到来の準備とし
てあつてほしい、否、なくてはならないものなのである。

こうした準備がととのうのを合図に、心の中の掃除が仕
あがる。虚心担懐（きょしんたんかい）という言葉が、文
字通りあてはまる情懷が開ける。ところへ、例えば、ただ
念仏してと聞えてくると、空気が、少しの間でもある
と、のがさず真空をみなすように、この声が、たちまち心
一杯にひろがってしみこむでくる。

この過程は偶然ではない、必要である、内に何のこたわ
りもなく、屈托もないときに、ある意思のこもった声を聞
けば、ひとりてに真似たくなる。その意志のままに心が従

だれこんで或る町を占領した。その際の出来事として、フ
ランスのタン新聞に、左の記事が掲載された。

町の人は皆逃げてしまった。あとに残つたのは犬ばかり
その数凡そ百頭、どれもこれも道端にしゃがんで、一日中
頭を一方に向けて、緊張した、悲しげな顔付で待ってい
る。何を待っているか、それは逃げた住民のたれそれが、
敵に対する恐怖と憎悪よりも、より強い希望、故郷を訪れ
て見たい、わが家の様子が知りたいという希望に駆られ
て、ときたま戻ってくることもある。そうした人の影が遠
くに見え出すと、そのあたりに待っている犬の間にいたま
しい動揺がおこる。彼等は一斉に耳をたてる、目を大きく
見開く、そして鼻を突き出して、しきりにおいを嗅ごう
とする。やがてその中の一頭が、急に跳り上って、狂気の
ようにあらあらしく、戦争でめちや／＼にこわされた道路
を、一散に飛んで行く。彼は主人を見つけたのだ。主人の
側に行きついた彼は、咽一杯に歓喜の叫びをあげる。ちぎ
れるように尾を振りちらす、飛びつく、舐める、そのから
だはふるえる喜びそのものである。

他の犬達は、しょんぼりわが居場所にくずくまっている
が、そのうち主人を見つけた犬が、主人と連れ立って、そ
こを引上げる時がくると、他の犬達は、皆その口先を天に
向けて、揃って遠吠えをはじめめる。その賜を扶（え）ぐる
わずには居られなくなる。これは心理の上から争えない事
実である。カナリヤが私一人を呼んでいるな、と気付いた
とき、私はカナリヤの声で、その意志を知つたのである。
聖人が、ただ念仏してと師から承わられたとき、口に念
仏を称えながら、心に親鸞一人がためなりけりと会得され
た。即ちその時、弥陀の五劫思惟の願をよくよく意志され
たのである。

こう考えてみると、この意志というのは、つまり弥陀の
五劫思惟の願であり、よき人の仰せであり、念仏である。
念仏の掛け声に対して、念仏の掛声でこたえる。その掛け
合ひ、そのすきのない実践修行が、今まで覚えのない響
を、念仏にききとるといふことである。丁度山路に踏み迷
つた人が、救いに来た人々のオーイオーイと呼ぶ声をきき
つけて、自分もオーイとこたえるように、念仏は、念仏す
る人から見れば、うけこたえをするまでのものと、わかっ
たところが転化のその三、信仰の現世における大詰めの段
落である。

金剛堅固の信心の、さだまるときをまちえてぞ
弥陀の心光撰獲して、ながく生死をへだてける
待ちも待たれもせぬ青い芒の曠野ではない、どちらが犬

で、どちらが主人か知らないが、まちつまたれつしたも
同志、手に手を取り合った言亡絶慮の光景である。

「ここまでくればもうお目出度うと、同慶の念仏を合唱し
てもいいのだが、念には念をいれる老婆心から、なお一言
注意をしておきたいことがある。〃今こそ私は、すっかり
念仏を手に入れることが出来た。従来とは受入れ方がガラ
リ違う。呼ぶ念仏に應える念仏。念仏の機がすっかり呑み
こめた〃とわかったような積りでいても、それは心の上層
だけに認められる変革で、中層の下部から基層にかけて
は、もとのまんまという矛盾がありはしないか。油断の出
来ないのはこの点である。〃頭は無神論者、胸はキリスト
者〃と、シヨーペンハウアーを評したことがあつた。そこ
である。明哲シヨーペンハウアーの如きでさえ、道理の上
で神を否定しながら、実践的に道義を説く段になると、キ
リスト教的なものから脱し得られなかったという。それと
やや趣きを同じゆうして、頭の中では他力信心、胸の内では
自力作善というような自家撞着に気づかずにいることは
ないか。私自身にもまんざらおぼえがないではない、時々
しらべる必要がある。

「念仏は余計なものとして作られたものではない。なくて

念仏にかぎるなどというのは、まだ自分の病症を十分に自
覚せずにいる病人自身の、自己判断である。

粥でもいいではない、それは、粥を他の栄養品の下位に
置くのである。粥がいいでもない、それは、粥を他の栄養
品と同位に置くのである。粥がいいでもない、それは、粥
を他の栄養品の上位に置くが、他よりも比較的すぐれてい
ると認めているに過ぎぬ。よしんば、粥にかぎると、極言
していても、相対的な最優位と認めるのでは駄目である。

粥でなくてはいけない、念仏でなくてはいけないのであ
る。〃ただ念仏でなくてはいけないのである。異物の混
じるのをゆるさないのである。念仏の一人働きに打ちまか
さなくてはいけないのである。

今までいろいろ思い迷っていたが、今という今、すっか
り了得させて頂けた、ホンにそうであったわいと、念仏の
粥をおし頂いたところが、惜しみなく奪った態である。

こないだ或人が私にむかつて、自分の信仰所感を語って
いたとき〃有難うございます。勿体ないと思えます〃と云
った。その勿体ないという言葉に、何だかへだてるよう
な、こぼむような気味を感じたので——もっともこれは今
に始まったことではない。これまでも勿体ないという言

はならないものである。と同時に、他の何物をもつても
代えることの出来ないもの、従って単独行動は念仏本来
の性分で、念仏と外のものとの共働をはかるのは、この
絶対性への反逆であり、冒瀆（ほうとく）である。念仏
はただ惜しみなく奪うものの上のみ、あまねくその全
分を光被する。其の一其の二の念仏がとかく坐りが悪か
つたのに、其の三に至って、にわかになびたりをさまり
がつくというのも、つまりそのためである。」

天王寺の門前で、法然上人が多勢の重病に悩む人々に粥
を頒けて食べさせている。これは高野の明遍僧都の夢であ
る。僧都はこの夢をみて、法然上人のお勧め下さるの
その粥であると気づいて、誤りを知り、念仏者になった。

念仏は粥である、罪悪深重煩惱熾盛で、どんな名医も匙
を投げる難病の者に、特に工夫された粥である。普通の食
料では消化できず、栄養もとれないほど胃腸の弱り果てて
いる病人目当ての粥である。これは重病人にとって絶対唯
一無二の必需品であつて、その外には栄養をとる方法は絶
えてないのである。

前に述べた其の一、其の二の見方、念仏もすてたもので
ない、念仏も結構役に立つ、念仏は他の何物にも劣らない

葉を聞くと、どうかすると一種の耳障りを覚えたことがあ
つたが今もまたその感に襲われたので、あなたの勿体ない
と仰言るのは、どういう意味で仰言るのですか。もしそれ
が、うなづき／＼膝のり出して、身に余る感謝のところで
仰言るのならまことに結構だが、もしその反対に、さえぎ
るように手を前に出して、いざりながらあとじさりする、
遠慮の意味であれば、それは感心出来ませんと注意した。

自からを施したさ一杯で、差し延べられる手をまちかね
る念仏に対して、遠慮は無沙汰である。どちらにどう転ん
でも、ヒョッコリ起き上る不倒翁（オキアガリコボシ）
は、腹の中に鈴のおもりを持っているからである。惜しみ
なく奪い取った念仏こそは、その鈴のおもりである。これ
さえあれば、いかなる場合にも、信仰はピタリとすわって
ゆるがない。金剛不壊の信心はこうして確立する。

かくて、念仏が思うままにその機能を發揮することがで
きる。

「心を弘誓の仏地に樹て念を難思の法海に流す」
という大信界は、ここにあらわになるのである。

池山先生聞信記

聚墨記

耳だけ借しておくれ

私共の六高生だった頃、池山先生から歎異抄のお話を聞ききた。その或る日、

「君達は前途洋々とした希望にみちているのだから、親鸞聖人のお言葉がわかりにくいだろうと思うが、どうか耳だけかしておくれ。歎異抄のことは耳にさえ入れておいてくれれば、心田に種を蒔くと同じで、何時か、必ず、大いにうなづいてくれる時が来る。一時すっかり忘れたようでも、時節が到来すれば、芽を出し、花を咲かせ、実がなるから」と。この確信があればこそ、悠々として、無理勧めされず、淡々として信味を告げて下さった。

心がかよう

お孫さん達と京都の動物園に行かれた時、「人と人と心がかようように、動物にもかよう。孫共と一緒に動物園に行ったが、小牛ぐらい大きい樺太犬がうずくまっていた。誰が近づいても知らぬ顔をして相手にしない。自分は元来大好きなので、つかつかと近寄って、オイ大将！何を考えている、と呼びかけると、フトこちらを見た犬が、のつそりと立ちあがって、何だ、あんたか、

念仏詩抄

弥陀の直説

和上おおせに

「ただお助けじゃで聞く一つ

それが弥陀の直説

五劫兆載永劫の

アブラアセのかたまり」

和上||禿頭誠師

ただお助けじゃは
弥陀の直説(じきせつ)
六字の仰せ
ナムアマミダブツと
聞く一つ
五劫兆載永劫の
アブラアセのかたまり

という様子を見せた。

畜生にも心が通じるように、如来のみ心も人間に通じて来るんだね。オネガイダカラスグキテオクレヨのころがね」

あおむけに

小春日和の或日、先生を蓮華谷の御宅にお訪ねすると、仰向けに仔犬ねころぶ。ひなたかなの一句を示されて、先日、椅子を庭に出して、新聞を読んでいると、脚元で仔犬がジャレていた。しばらくすると静かになったので、どこかへ行ったかな、と思つてあたりを見わたすと、脚元で仔犬が仰向けに心地よげに寝ころんでいた。

本来犬は警戒心が強くて、寝る時でも仰向けにねころぶなどほしくないのに、よく考えて見ると、この仔犬は、秋陽を全身に浴びているうちにねむくなった。すぐそばに主人は居るので、どんな敵も心配でない。そこでつい、ハメをはずして仰向けにねころんだとわかった。

その仔犬の寝ざまをとおして、警戒心のやまぬ我々人間も、仏の大慈悲心を身にうけて、よきことも、あしきことも業報にまかせて安心させて頂けるんだと教えられた。

木村無相

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

今この時なり

和上おおせに

||法照禪師

文殊菩薩に会うて
ただ今わが身に
相應の法は何ぞや
文殊菩薩答えて曰く
まさに念仏すべし
今この時なり
と——

今
今
今この時なり
と

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

仰ぐばかり

和上おおせに

〃この心は万劫の仇(あだ)なり

無有出離之縁の機なりと

知らしてもらえは

待つたり調べたりする

手が尽(つ)きて

願力授受の大悲を

仰ぐばかり——〃

大悲のかたまり
ナムアミダブツ

死ぬのはいつでも
お助けは今
今 今 今——

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

御 恩 徳

和上おおせに

〃心にもし形あらば

捕縛(ほぼく)して

性根(しようね)のつくまで
たたかん——〃

心が悪いか

わたしが悪いか

心はわたしの

使いなり

わたしを照らして

わたしをつかまえて

たたいてくださる

ナムアミダブツを
仰ぐばかり
ナムアミダブツと
仰ぐばかり

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

お 助 け は

和上おおせに

〃今 お助け下さるる

今宵(こよい) 死んでも

参らせて下さるる

今の口元の御勅命

今じゃ

今じゃ——

今のお助け
ナムアミダブツ

今のお勅命
ナムアミダブツ

六字の親さま
たたいてくださる
ご恩徳——

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

法 信 抄

私も満十七才以来、五十五年、念仏、念仏、念仏と、念
仏の文字が四十二返(其他名号七、名字一、)も出てい
る『歎異抄』に育てられてきました。

私の同朋会館時代に無相用の『歎異抄索引』をつくりか
けてまして、そのままになっていますが、

念仏、往生、本願、煩惱、

等々を段々集めております。少年の頃から歎異抄ばかり
読んでいますので、称名とか名号とか名字と区別して申
すより一口に念仏という方が一番親しみ深く使い易い
のです。私の集計だけお知らせします。

本願——五十六回、 念仏——四十二回、
往生——三十六回、 煩惱——十六回、

以上

親鸞もこの不審ありつるに

花田正夫

表題の一句は、歎異抄の第九章にある有名なことばである。唯円房が聖人から念仏のいわれをおききし、非常なるこびに踊りあがつたが、その後、歳月がたつにつれて、信心の火が消えたのではないけれど、ほとぼりがさめてよろこび心も微温的になり、浄土に往生して、真実のさとりを得させて頂けると信じながらも、一向にたのしめぬについて、色々と腐心したものの、心がそっぽをむいて、どうしてみようもなくなり、とうとう聖人におたずねにおよんだのである。

もし聖人がそんなことでは、と一言仰言ったら、唯円房には救いの綱は切れるのである。ところが思いもかけず、親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにてありけり」

と仰言る。これを聞く唯円房の驚きは如何ばかりであったであろうか、ここまでおいでの聖人でなしに、唯円房と同座して下さる聖人である。その聖人が、

げようと御本願をおこして下さつたのであるから、よろこべず、たのしめぬ我等のための悲願と知られて、いよいよ頼もしいではないか、と御迷悞下さるのである。

以上のことは、歎異抄を手にされた方はみんなよく知られていることであるが、ここを心をこめて見よう。

世間一般の教えは、これこれの善い事をすれば、こういふ善い果報をえられるから、君もそうしなさい、といった風なものばかりで、それについて行けない者はかえりみられない。それなのに、かくあるべしとは百も千も承知しながら、どうしてもそうなれない者に、自分も同じだよと御一緒下さる聖人の御心にふれるのである。そこに私自身は、聖人の慈懷に引き入れられる、その趣きは、迷いに迷うて途方にくれる子供の耳に、子を求めて叫ぶ母の声がとどくや否や、母の名を呼びながらそのふところに飛びこんで行くのと同じである。

さて、同情は人生にうるおいを与える、情を同じくすること、心と心との交流もひらける。仏教で菩薩の行として同事の行を掲げられる。何事もそれになりきって行くことは大切なことである。画家が花を描く時、自分が花を描くのでなく、花になりきる時、花が画家の手を動かして、

「よくよく案じみれば天に踊り地に躍りてもよろこぶべきことを、よろこばぬにていよいよ往生は一定と思いたまうべきなり。」

と続けられる。唯円房にして見れば、よろこべぬ心だけを見て悲歎していたのに、聖人は、そうした喜べぬ者を見捨てたまわぬ本願のたしさを仰いでいられるのである。

更に聖人は、
「よろこぶべき心を押えてよろこばせざるは煩惱の所為なり。しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きのわれらがためなりけりと知られていよいよ頼もしくおぼゆるなり」

と、唯円の不審に答えられる。喜べないことを歎く唯円房に、その原因は煩惱のためであるときとめて下さつて、而も煩惱の塊りの身には自分でその始末はつかないことを仏はすでにお見抜き下さつて、それを悲憐して救い遂

カンパスの上に現れるのが本当の絵であろう。問いは、その意味が明かになれば、その中に自然に答えが見出されるので、問いの中に答えはある、別に答えを加えるは無用。こうしたことを観念的に知るのは容易であるが、実際に情を同じくし、事を同じくすることは我執のかたまりの身には至難というより、不可能であろう。一角相手のころになった積りでいても、自分がそう思っているだけに終る。某実業家が、青年の頃ある宗教に感動して、月々月給の何割かを献金し続けて、還暦を迎えた。そこで自分の身辺をかえりみると、教会や信者の人々が、金をもとめて集って来るのに驚いて、自分は宗教のためによく尽してきたと思っていたが、かえって墮落させ、邪魔をしていたと長歎息した実例がある。

又白隠禅師の逸話に、寺庭の蓋で蜻蛉の蛹が、羽化しようとして、苦しんでいるのを見つけて、早速手をのべて殻から出してやった。しばらくすると羽根も立派になったので、サア飛べと放すと、地におちた。そこで枝にとまらせておいて、夕方にしらべて見ると、地に落ちて蟻の餌食になっていた。そのことを寺に出入りの老人に話されると「私も同じあやまちをしました。蜻蛉は苦勞している間に体力がつくのには、人手を加えたので飛べないものになったのです」と云った。この時、禅師は、寺に集る雲水にも、

あまり手を借しすぎて、独り立ちの出来ぬ借にしていたことを大きに慚愧せられたとある。

以上の実例はいたるところにある。そうあってはならぬ、本当の同情、同事をせねばと願うものの、その無力さ、大空を憧れながらも翼を失った小鳥は唯地上を走り廻ることしか出来ない様に。

親鸞聖人はこのことを、愚禿悲歎述懐和讃に

小慈小悲もなき身にて 有情利益はおもいまじ

如来の願船いまさずは 苦海をいかでかわたるべき

と述懐していられる。更に歎異抄第四章に、

「聖道の慈悲というは、ものをあわれみかなしみはくむなり。しかれども思うが如くたすけとぐることを極めてありがたし云々。」

と、人間の持つ同情とか、親切心というものに限界があることを明示されて、末通る弥陀仏の大慈に、たすからぬ人も、たすけようとしてもそれが出来ぬ者も、共に帰するようにと仰言るのである。

道綽禪師の安樂集に、川に落ちて溺れる母をたすけようと飛びこんだ兄が、しがみつく母のために共に溺れはじめた。これを見た弟は舟を見つけて、それを漕ぎ寄せて二人を救うた例をあげて、生死の大海にわれひと共に、如来の願船によれと勧められている。そこにどうして見ようのな

り、六角堂に百日の参籠の末、吉水に恩師聖人をたすねられたのである。

血氣穢んな二十九歳の聖人と六十九歳の円熟された恩師との会見である。二十年間の苦勞の一つ一つを、すべてそのまま聞きとられた恩師は、御自身の十五歳から四十三歳までの歩み「法相、三論、天台、華嚴、真言、仏心の諸大乘の宗、あまねく学びことごとく明るに、入門は異なるといえども、皆仏性の一理を悟頭すことを明かす。所詮は一致なり。法は深妙なりといえどもわが機すべておよび難し。經典を披覽するに、その智最も愚なり、行法を修習するに、その心ひるがえってくらし。朝、朝に定めて悪趣に沈まんことを恐怖す。夕、夕に出離の縁の欠けたることを悲歎す。忙々たる恨みには渡に船を失うが如し、朦々たる憂には、闇に道を迷うが如し。云々」と、十愚愚痴の御自身をそのままに語られたであろう。そこに聖人は、恩師の中に自分を見出され、恩師は自己の再現を聖人に見出された。

士は己を知る人のために死す、と云うが、恩師聖人の上に己を知る人を見出され、その師の指差される、選択本願の念仏をそのままに受得されたのであった。そこに親鸞聖人に御一緒される法然聖人と、唯円房と同座される親鸞聖人が二重写しされてくる。しかもそれは単に部分的一致で

い者も救い遂げられることを教えられる。

さて、同座して下さる聖人は、如来の願船に乗じて居られればこそできるので、その聖人は、聖人であって聖人でない、私共にとっては如来の権化(ごんけ)と仰がれる。

子になりきるのには親だけである、私共に同座して下さる方は、そのまま久遠の御親である。これは聖人を徒らに祭りあげて偶像化するのではない。夜空に光を放つ名月は、月そのものに光も熱もない、美しく見えるのは太陽の光の照り返しであるように、聖人の上に仏の無碍光を拝するのである。

無慚無愧のこの身にまことの心はなけれども
弥陀の廻向の御名なれば功德は十方にみちたまう
と、聖人御自身も述べられている。

私は、唯円房と聖人とのこの応答を読みながら、法然、親鸞の両聖人の吉水の会見を想起させられる。

「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」

と受得されたのであるが、叡山二十年の修学修行すべてむなしく、地獄一定の身の壁に突きあたられて、叡山を下なしに、全煩惱の中に同調同歩されるのである。そうした源流を仰げば、弥陀仏の応現に帰する、不完全は人間同志の思いやりや、同感では出来ない。

和讃に、

久遠実成阿弥陀仏 五濁の凡愚をあわれみて

釈迦牟尼仏としめしてぞ 迦耶城には応現する

大心海より化してこそ 善導和尚とおわしけれ

末代濁世のためにとて 十方諸仏に証をこう

智慧光のちからより 本師源空あらわれて

浄土真宗をひらきつつ 選択本願のべたまう

阿弥陀如来化してこそ 本師源空としめしけれ

化縁すでにつきぬれば 浄土にかえりたまいにき

と、聖人の御目には、釈迦、善導、法然、ならびによき師の上に弥陀仏の化現を仰がれている。師の指差しによって、弥陀仏の名月を仰ぎ、弥陀仏に帰することによって、いよいよ仏恩師恩の深厚なことを渴仰せられる。

三朝浄土の大師等 哀愍摂受したまいて

真実信心すすめしめ定聚のくらいにいれしめよ

如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報すべし

師主知識の恩徳も ほねをくだきても謝すべし

とは聖人の御晩年の御讃仰である。

あとがき

安藤州一師が学生時代、病と貧で苦しんでいた夏、浩々洞で清沢先生のお世話になっていたが、或日、先生の前にその苦衷を訴えられると、黙って聞いていられた先生が、

『結局、君は死が怖いのだ。ソクラテスの「哲学者は死の問題を研究すべきものなり」と云い、エピクテタスは「死の門戸は常に開いて居る」と。死の問題の解決を得ずして、現在の苦悶を除かんとするは、不可能の事なり』と。

近角先生の言葉に「ころんで角力をとれ、最悪の場合を覚悟して事に当れ」とある。

私共は、生きること、成功することばかりに眼を向けて結局欲望に限りのない身には不平と不満と焦慮に終る。生死出ずべき道を、積尊自ら体得されて、生死海にはてしなく流転する者への大悲のお呼び声に、私共の行くべき道は自然に開かれて来る。

池山先生の御忌月が近づく今月、先生最後の御講話を「仏と人」から頂いた。その先生は、ただ念仏しての一言は、よき人

の仰せの極みであり、聖人の信念の根幹であり、我等に与えられた無碍の一道である、との仏心を裏に表に述べられて、誘引して下さったのである。

たのまるる。ただ念仏のわれにありさるべき業はさもあらばあれ

の先生の信念を心あらたに知らされる。

○

木村さんは、最近、目が段々見えにくくなり「目さぐり」で書いておられます」と、目をひつつけて書くことを「目さぐり」と新語で書いて来られた。チラッと版画家、棟方志功の、目をくつつけての彫刻の姿を思ひ浮かべた。

京都一道会 御案内

時 十月三十日(日)午後一時

所 京都市右京区山田開町、浄住寺

市バス、京都駅より苦寺終点下車

新京阪、桂乗り換え、上桂下車。

△御案内▽

○一道会例会。毎月、第一、二、三日曜午後一時半。南区駈上町二の八八、一道会館

市バス、新郊道一丁目下車。地下鉄、新瑞橋終点下車。

○教西寺法話会。毎月二十四日、午前午後昭和区小椋町二丁目四番地。

市バス、北山町、又は御器所通り下車。地下鉄、北山下車。

○修道会、毎月七日午後一時

尾西市三条板倉、蓮光寺

一宮駅よりバス尾張三条下車。(但し日曜を除く)

定価 半年 七〇〇円(送共)
一年 一四〇〇円(送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八

編集・発行人 花田 正夫

電話八二一局七〇三七番

愛知奥西加茂郡三好町大字福谷

印刷人 坂部 光雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座 名古屋 一〇四七〇番

郵便番号 四五七